

日本遺産認定

関門ノスタルジック海峽

時の停車場、近代化の記憶



【日本遺産 認定ストーリー概要】

古来より陸上・海上交通の要衝であった関門地域は、幕末の下関戦争を契機とした下関・門司両港の開港以降、海峽の出入口には双子の洋式灯台が設置され、沿岸部には重厚な近代建築が続々と建設された。

狭隘な海峽を外国船が行き交う景観の中、日本が近代国家建設へ向け躍動した時代のレトロな建造物群が、時代が停止したかのように現在も残されている。渡船や海底トンネルを使って両岸を巡れば、まるで映画のワンシーンに紛れ込んだような、ノスタルジックな街並みに出会うことができる。

※ノスタルジック…懐古的な、懐かしい雰囲気

※狭隘…狭い



△唐戸町沿岸(明治末年ごろ)洋風建物は、英国領事館(中央右、現存)とジャーディン・マセソン商会(中央左、戦災で焼失)



△元治元(1864)年の下関戦争で四国連合艦隊陸戦隊に占拠された前田砲台。従軍写真家により撮影された。写真に基づくイラストと共に、広く海外に報道され、近代化への分岐点となった。



△ブラントン率いる英国人技術者集団により建設された六連島灯台(左)と門司の部埼灯台(右)

関門海峡の歴史地理的位置

古代から、主要な街道は関門海峡の地で結び付き、多くの人や物資の交流が行われてきました。瀬戸内海と日本海の結節点でもある関門海峡は、陸路と海路の十字路を形成し、幕末には外交や通商を迫るため、西洋諸国の黒船も通過するようになります。

その重要性を知る長州藩の志士は、海峡を封鎖し攘夷を実行。これを契機に下関戦争が起こります。日本が開国へ向かう歴史を変える分岐点となったのです。

国際港湾都市「関門港」の開港と発展

下関戦争で大敗した長州藩は元治元(1864)年、講和使節に高杉晋作を任命して講和を成立させ、下関港は事実上開港しました。

海外との玄関口になった関門海峡には、幕府が英国との間で締結した大坂条約(慶応3(1867)年)により洋式灯台が設置されることになり海峡西側と東側に灯台を設置、共に明治5(1872)年に初点灯され、日本の文明開化と関門海峡を照らし始めます。

双子の灯台の灯りに導かれて、江戸時代から北前船の寄港地だった下関港と、背後に石炭の一大供給地を抱えた門司港は、創業間も

ない大阪商船株式会社や日本郵船株式会社が進出し、特別輸出港や大陸との定期航路の寄港地に指定され目覚ましい近代化を遂げました。

日本遺産とは

地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを文化庁が認定するものです。

ストーリーを語る上で欠かせない魅力あふれる有形や無形のさまざまな文化財群を、地域が主体となって総合的に整備・活用し、国内だけでなく海外へも戦略的に発信していくことにより、地域の活性化を図ることを目的としています。

